『人間失格』
太宰治（新潮文庫）

皆さん、太宰治の『人間失格』という作品を読んだことがありますか？

大学での生活にも慣れ、授業の内容や友人関係、将来の就職先や

家庭などに思いを馳せるような時期でしょう。
しかし、どんなに順風満帆に見えても人生そうそういいように

いくわけではありません。この作品を読んで改めてそれを感じました。
小さい頃から自分の本心を悟られないように生きていた主人公の

幼少期からは想像できないような末路。
人生の反面教師の生きざまを是非ご覧になってください。



『スタートライン　盲目のスプリンター』
原夏美（講談社）

「人間はゴールがあるから走るのではない。人間が走るのは、

走ることができるのは、スタートラインがあるからである。」

突然目が見えなくなった少女と、突然走れなくなった少年が出会い、

走者と伴走者としてパラリンピックを目指す。
一人では走れなくても、二人なら走ることができる。

２人を繋ぐ５０ｃｍの距離は、健常者と障害者の距離でもあると思う。

生きる意味、生きる喜び、生き方を見つめ直す１冊となった。



『武士道』
新渡戸稲造　(PHP文庫)

武士道は長い封建制度の古めかしい因習と思われるかもしれないが、

実際にそうだろうか。現代でも「サムライ」は肯定的に使われ、

「卑怯者」といった言葉は武士道から派生している。
人としての普遍的な倫理観を、騎士道、キリスト教といった世界文化と

比較しながら書かれている本書は、日本人としての伝統的精神を教えてくれる。
背筋を伸ばして生きようと思わせてくれる一冊だ。



『「かわいい」論』
四方田犬彦（ちくま新書）

「かわいい」は日常に溢れている。日本で「かわいい」という言葉を聞かずに

一日を過ごすことは不可能であろう。今やメディア、延いては世界にも

「かわいい」文化は広がり、巨大な市場を作り出している。
「かわいい」とは何なのか。なぜ日本の「かわいい」がこれほどまでに

注目されているのか。枕草子、セーラームーンから「きもかわ」、

「萌え」など――本書では「かわいい」を２１世紀の美学として位置づけ、

その構造の歴史的、空間的な分析を試みている。

何かにつけて「かわいい」と言ってしまう、私のような人に読んで欲しい。